



NEWSLETTER

ニュースレター

2026



2024年度入学 日本語・日本文化研修留学生 修了式

[前列] 日本語・日本文化学類の先生 [後列] 日研究生と学術チューターの皆さん

日研究生の皆さん 修了おめでとうございます



筑波大学 日本語・日本文化学類（以下、日日学類）では2025年9月に、マレーシア、セルビア、イラン出身の日本語・日本文化研修留学生（以下、日研究生）4人の修了式を開催しました。一年間、異文化の中での生活を通じて、学業だけでなく、人間的にも大きく成長した修了生たち。ソウ・ジア・ワイさんは謝辞で、「私たちにはきっとそれぞれ“伝えたい日本”があると思います。その思いをもとに、これから日本と母国との架け橋になれるよう、努めてまいります」と力強く語っていただきました。

日日学類では1989年以来、各国から日研究生を受け入れており、これまでに49ヶ国、364名の修了生が羽ばたきました。今後も日本とそれぞれの国との相互理解を深め、世界の発展に貢献できる人材の育成に注力してまいります。

CONTENTS

- 02 2024年度日研究生プログラム 修了生に聞きました！
- 04 FOCUS: 修了生は今〜リマ・ハファエレさん
- 06 NEW ARRIVAL: 2025年度入学の日研究生ご紹介
- 07 日研究生のひろば〜あなたの国の魅力的なまち
- 08 日本語・日本文化学類教員によるコラム（江口真規先生）

修了生に聞きました!

2024年度日研生プログラム修了生に、筑波大学での留学生活の中で特に印象的だったことや、今後の夢などについて寄稿していただきました。



「世界は広いですね。」

そう、筑波で入っていたサークル「Realjam」の先輩に言われたことがあります。その言葉は、私の留学期間中の経験や思いを代弁してくれたと、今さらながら思います。初めて母国を遠く離れたというもありますが、日本で過ごした一年間でつくば以外にも、津々浦々とまではいかないものの、サークルの

合宿で新潟へ、友人との旅行で福岡へと、様々な場所を旅することができました。それで空間的な意味での「世界の広さ」を実感することができました。

冒頭で引用した言葉は、サークルのある飲み会で、テンションが上がった他のメンバーたちの様子を見た私の先輩が言ったことだと鮮明に覚えています。記憶が正しければ、その後、その先輩にマレーシアの飲み文化について聞かれ、その違いを説明しました。もちろん、世界が広いというのはただ空間的な意味だけでなく、異なる文化が多く存在していることも指し示しています。日本にいた一年間で日本の社会とその文化の様々な側面に触れられたことは、私の日本社会に対する理解を大いに深めてくれたに違いありません。

半年前に帰国して以来、クラブ活動や学外での活動を通して日本社会との繋がりを保ち続けています。ごく最近では、筑波大学主催の「DOJO in Malaysia」に参加させていただき、再び筑波大生と協働することができました。今後の抱負としては、大学を卒業後、日本の大学院に進学し、さらに日本とマレーシアとの懸け橋になりたいと考えています。

ソウ・ジア・ワイ
マラヤ大学（マレーシア）在学

筑波大学、そして日本で過ごした一年間の思い出を、これから何度も振り返ることになるでしょう。筑波大学で得た学びと知識によって、日本語や日本文化に対する理解や興味が深まりました。交換留学を選び、筑波大学に入学できたことを嬉しく思います。というのも、視野を広げ、日本語・日本文化の分野における様々な話題に触れることができたからです。

そうした経験の一つが、母国の大学では体験できない、茶道の授業です。この授業を通じて、茶道は単にお茶を点てて飲むだけでなく、一つ一つの動きに意味があることを学びました。また、多様な和菓子とともに抹茶をいただき、その奥深い味わいを存分に堪能することができました。さらに、実際のお茶会も体験でき、大変貴重な経験になりました。

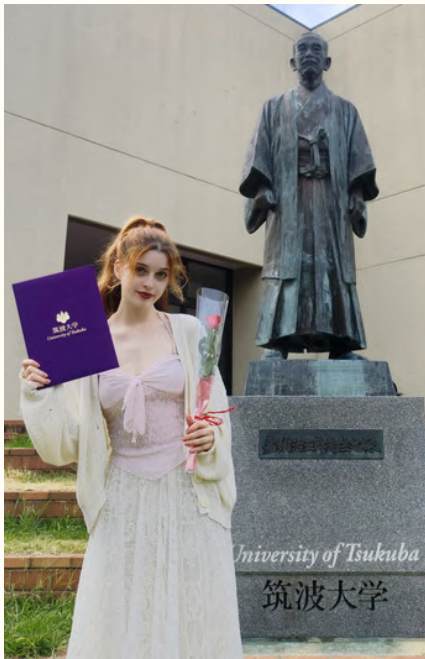
そのほかに、日本にいた時の私の心構えは、帰国後に後悔したくないということでした。だからこそ、マレーシアにはないものを精一杯日本で楽しむようにしていました。様々な都道府県を旅行することで、より広い視野で日本を体験することができ、それぞれの地域の個性に触れることができました。

最後になりましたが、修了レポートをご指導くださった江口真規先生に心より感謝申し上げます。今後も日本語のさらなる向



上に努め、筑波大学で得た知識を将来に活かしていきたいと思っています。

チャン・スー・イン
マラヤ大学（マレーシア）在学



2024年度入学の日研究生、オルガです。筑波大学での一年間を終えてから、もう半年が経ちました。

留学生活で特に心に残っているのは、先生方とチューターの皆さんの温かい支えです。困ったときだけでなく、私の関心や挑戦したいことについても、親身に相談に乗ってくださいました。とりわけ修了レポートの執筆では、構成から内容の細かい

部分まで丁寧に指導いただき、自分の考えをより深めることができました。

筑波大学での学びを通して、サステナビリティや地域活性化、オーバーツーリズムといった現代的な課題にも関心を持つようになりました。以前はあまり馴染みのなかったテーマですが、日本社会を具体的な事例として考える中で、文化研究を他分野と結びつけ、現実の問題に向き合う視点を得ることができました。

さらに、世界各国から集まった仲間との出会いは、私の視野を大きく広げてくれました。学業だけでなく、サークルの活動を通じて多くの縁に恵まれ、今もそのつながりは続いています。

現在、母国セルビアの大学を卒業し、再び日本で働く準備を進めています。これからは社会人として歩みながら、セルビアと日本を結ぶ架け橋となり、学び続ける姿勢を大切にしていきたいと思います。つくばでの一年は、これからの挑戦の土台となる大切な時間でした。

コプリヴィツァ・オルガ
ベオグラード大学（セルビア）卒業

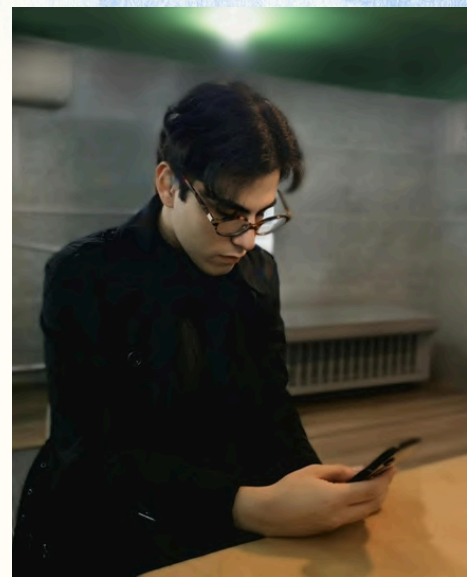
日本での生活を振り返ると、多くの「苦楽」がありました。私にとっては苦い経験さえも甘く感じられます。それらはすべて私をより良い人間へと成長させてくれたからです。

先生方やスタッフの皆様の温かいサポートのおかげで、最後の日まで「外国にいる」という不安を感じることなく、筑波大学での学びの一分一秒を大切に過ごすことができました。この経験は、私が社会にとってより有益な人間になるための大きな糧となりました。

また、アルバイトの経験も非常に素晴らしい思い出です。日本各地から来た人々と交流する機会を得たことで、専門知識だけでなく、将来に向けた貴重な人生経験を積むことができました。

特に日本社会で最も美しいと感じたのは、見返りを求めず他者を助け、思いやる姿勢です。私はそれを「真の人間愛（ヒューマニティ）」であると感じました。

今後は、多くの方々の支えがあって得られたこの知識を活かし、自国や人々のために尽くしたいと考えています。社会の中で影響力のある役割を果たせるよう、これからも精進してまいります。



筑波大学での日々は、私にとって一生の宝物です。末筆ながら、皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

ラハマティヤン・アミールホセイン
テヘラン大学（イラン）在学

このコーナーでは、修了生が今、世界各地でどんな活動をしているのかをご紹介します。今回寄稿してくださったのは、ブラジル出身のリマ・ハファエレさん。日本を拠点に、どのようなターニングポイントを経て人生を切り拓いてきたかについて、書いていただきました。読者の皆さんにとっても「自分の可能性」「夢の実現」について考える機会になることを願っております。



上：2005年度入学「日本語・日本文化研修留学生」修了式
下：筑波大学サークル「Realjam」の合宿

2005年から2006年の一年間、文部科学省の「日本語・日本文化研修留学生」プログラムで日本に滞在し、今年で日本に来て15年を迎えました、ブラジル出身のリマ・ハファエレと申します。

筑波大学への留学は、私が夢見た日本ですっと暮らしたいという思いを叶えるための第一歩でした。留学中に得た経験や、その後どのように道を切り拓いてきたかについて、このコラムでお話したいと思います。

中学生のときの家族旅行をきっかけに

私が日本語を学び始めたきっかけは、航空会社で働いていた父の影響です。子どもの頃から国際的な環境に興味を持ち、いつか海外で働きたいと夢見ていました。中学1年生のときに初めて日本を訪れ、その時の衝撃と感動は今でも忘れられません。家族旅行でしたが、その経験がきっかけで日本語の勉強を始めました。

大学生になるまで日本語の勉強を続け、2003年には母国のリオデジャネイロ連邦大学の日本語学科に入りました。そして2005年から、「日本語・日本文化研修留学生」として、日本で一年間、夢中になって学びました。

筑波大学を選んだ理由は、東京のように騒がしくなく、落ち着いた環境の中でじっくり学べることでした。また、全国から集まる学生たちと交流できることや、自然豊かな土地で

集中して勉強できる点も魅力でした。住んでいたのは平砂寮でした。

留学生活の思い出～楽しさ、そして課題の克服～

大学生活で一番心に残っているのは、さまざまなサークルに参加したことです。ダンスサークルの「Realjam」の皆さんと仲良くなり、支え合いながら日々を過ごしました。また、チューターや友人たちの支えもあり、大学生活が一層楽しいものになりました。サークル活動や国際交流のボランティアを通じて、日本語のスキルも少しずつ向上していきました。

もちろん、挑戦もありました。実は、最初の8ヶ月間はほとんど日本語が話せませんでした。留学の最後まで、うまく話せるようになるのか不安に思ったこともあります。でも、周りの日本の学生や先生、友人たちの支えのおかげで、徐々に日本語が上達し、無事に帰国することができました。あっという間の一年間でしたが、私の人生にとってとても大きな意味を持つ時間となり、それから私の人生に素晴らしい機会や出来事がたくさんやってきました。

国際交流の現場で尽力する日々

留学後、一旦ブラジルに帰国し、社会人として働き始めました。ブラジル支店のある日本の総合商社に入社し、翻訳や

貿易の仕事に携わっていました。でも、留学で得た経験から、日本で働きたい気持ちが強くなり、2011年には外務省や自治体国際化協会（CLAIR）などが開催しているJETプログラムのもと、石川県小松市の国際交流員（CIR）として働き始めました。国際交流員としてさまざまな事業に関わりました。翻訳・通訳はもちろんのこと、インバウンドの受入整備や海外への発信、さらには小松市の魅力を活かしたブランディングや伝統文化振興にも携わりました。

その後、CIRのお仕事のおかげでご縁がありまして、石川県庁の部署に応募して翻訳や通訳の仕事に就きました。そこで8年間働き、さまざまな行政・官庁の経験を積むことができました。特に印象に残っているのは、東京2020オリンピック・パラリンピックの合宿誘致やクルーズ船誘致の仕事です。海外のチームに対して、練習環境や宿泊、交通のサポートを行い、大会の成功に向けて準備を進めました。また、地域の経済を活性化させるために、金沢港を利用したクルーズ船誘致も携わりました。石川県庁の次は、石川県にある国連大学のオペレーティングユニットの、主に広報部で働きました。

国際交流や多文化共生への思い

私は、自治体にとって国際交流はとても重要な分野だと考えています。グローバル化が進む中で、さまざまな世界と共通の課題について意見を交換し、解決策をともに考える場や方針が必要だと考えます。そのために、国際交流の専門の窓口や仕組みが必要だと感じています。

また、多文化共生についても、在住外国人の方々が地域社会の一員として共に暮らしている今の状況を大切に、今後は各自治体に多文化共生の推進に携わる職員を配置していくことも重要だと考えています。



留学後、CLAIRのJETプログラムの参加者たちとの食事会

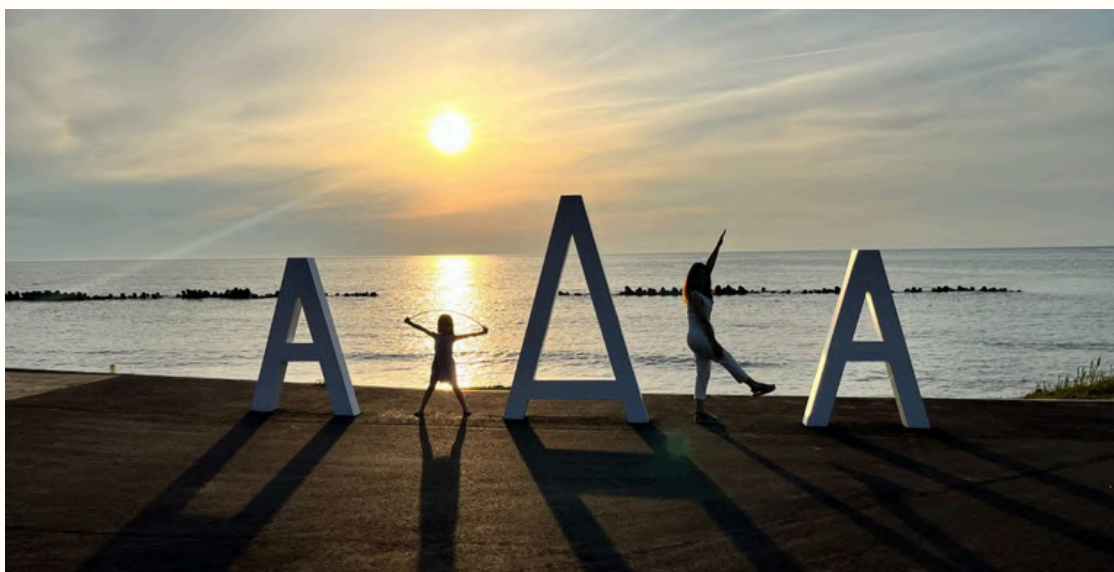


「COOL JAPAN」スタジオにて

さらなる新天地へ

これまで、日本で生まれた私の子どもの子育てとキャリアを両立しながら、国際交流・国際協力事業で活躍してきました。また、NHK BS1の番組「COOL JAPAN ～発掘！かっこいいニッポン～」では、キャストメンバーとして10年間出演しています。そして新年度からは、東京の国際協力事業に関わるグローバルな法人で働くかもしれません。次の日本と海外の良い関係を築くために、橋渡し役として頑張りたいと思っています！

リマ・ハファエレ



日本海と夕日が見える、石川県内の有名なパワースポット「安宅海岸」



2025年度入学の日研生ご紹介



2025年9月 日本語・日本文化研修留学生オリエンテーション



2025年10月 「日本語・日本文化実験実習」 研修旅行
上：国立歴史民俗博物館 右：成田山新勝寺



2025年度には、トルコ、マレーシア、スロベニアからの留学生を日研生として迎えました！この機会に、皆さんに日本滞在への思いなどを伺いました。

【Question】①趣味 ②日本に興味を持ったきっかけ
③日本滞在中にやりたいこと ④修了レポートのテーマ

イイビルギン・ムスタファ

- ①散歩、ジョギング、パソコンゲーム、体操など
- ②日本語は綺麗に聞こえると思い、独学で勉強を始めました。
- ③勉強と共に旅行とアルバイトをしたいです。
- ④二つの帝国における近代化の比較 — ヨーロッパの病人とアジアの新興帝国 —

リン・ニキ・ウェン・ケイ

- ①映画鑑賞
- ②ジブリ映画（特に「千と千尋の神隠し」と「崖の上のポニョ」）が好きで、日本文化に興味を持ちました。
- ③仙台へ一人旅し、津波被災地も訪れたいです。
- ④日本の公共空間における「心のSOS」関連ポスターの分析

ムセク・レシュニク・ナヤ

- ①絵を描くこと、編み物、散歩
- ②父にもらった漫画のおかげで日本語が好きになりました。
- ③大切な思い出を作ったり、日本の自然を訪れたいです。
- ④日本語学習者のカタカナへの挑戦 — リュブリャナ大学の学生の作文におけるカタカナの間違いを中心に —

イルギン・ヴォルカン

- ①水泳とバレーボール
- ②日本の音楽に惹かれ、日本語に興味を持ちはじめました。
- ③できる限り日本各地を訪れてみたいです。
- ④水上造形をめぐる日土比較美術 — 墨流しとエブルにおける表現と美意識の特質 —

コチャク・オヌル・セツタル

- ①写真撮影と歴史書の読書
- ②高校時代に会った日本音楽です。
- ③日本各地を巡り理解を深めたいです。
- ④日本におけるトルコ料理のイメージと内容 — ケバブ屋を中心に —

日研生プログラムの修了生/現役生からのお便りコーナー。
今回のテーマは

「あなたの国の魅力的なまち」

世界の国や地域には、その土地ならではの文化や歴史が息づく魅力的なまちがたくさんあります。そこで今回は日研生プログラムの修了生や現役生に、ふるさとのとっておきのまちやスポットをご紹介します。ぜひ将来の旅先として、足を運んでみてはいかがでしょうか。



マリボル (スロベニア)

私の故郷であり、スロベニアで2番目に大きな都市であるマリボル (Maribor) では、さまざまなアクティビティを体験したり、多くの観光スポットを巡ったりすることができます。誰でも楽しめる都市だと思うので、これから少し紹介します！



この都市はかなり古いので、神聖ローマ帝国時代にまでさかのぼる遺跡があります。昔は城郭都市だったため、マリボル城や石垣の跡も市に残っています。地下にはワインセラーがあり、見学もでき、ワインの試飲も楽しめます。そして古いものといえば、マリボルには世界最古のブドウの木「スタラ・トルタ」があり、ギネス世界記録にも登録されています。この木からは現在も毎年ワインが造られています。

マリボルには自然や緑も多く、散歩できる公園や森、湖があり、都市を流れるドラヴァ川ではボートに乗ることもできます。最後に、都市の郊外にはポホリエ山地があり、冬にはスキーなどのウィンタースポーツができ、夏にはハイキングやマウンテンバイクなど、さまざまなスポーツを楽しむことができます。

皆様、スロベニアを訪れる際には、ぜひマリボルにも足を運んでみてください！

2023年度日研生
デ・プレー・クリスティヤン



猫の像がたくさんある町 - クチン

町の真ん中に大きな猫の像が立つ町があると聞いたら、行ってみたいなりません。そんな独特な町が、私の国マレーシアのボルネオ島のサラワク州 (Sarawak) にあるクチン (Kuching) です。「クチン」はマレー語で「猫」という意味で、町のあちこちに猫の像があります。私は猫が好きなので、猫の像を探しながら町を散歩するのはきっと楽しいだろうと思います！

しかし、クチンの魅力は猫だけではなく、周辺にはボルネオ島の豊かな熱帯雨林が広がり、自然を身近に感じることができます。近くの保護センターではオランウータン (Orangutan) を見ることができ、餌の時間になると森の中から現れることもあります。また、サラワクは「ホーンビルの国」とも呼ばれ、大きな喙を持つホーンビルという鳥 (Hornbill) を見ることがもできます。

猫の像を探して町を歩き、豊かな自然や動物にも出会えるクチンは、とても魅力的な町です。マレーシアに行く機会があれば、ぜひ訪れてみてください！



クチン (マレーシア)
Photo: Wee Hong

2025年度日研生
リン・ウェン・ケイ・ニキ



キーウ「怪物屋敷」(ウクライナ)

私がこの怪物屋敷を知っているのは、小さな子供だった頃からですが、特に印象に残っているのは16歳の時に日本から帰国し、久しぶりに見た時です。天気のいい暖かい日で、両親とKyivを見学しました。この建物怪物たちは、今にも動き出しそうなリアルさがあり、一つ一つ見るのにかなりの時間がかかります。当時はまだ珍しかったセメントを使い、このような扱いやすい材料のポテンシャルを見せるのも、建設目的の一つだったそうです。ウクライナが勝利を成し遂げ、私たちの上空に再び旅行者の飛行機が飛べるようになった時に、多くの観光客に見てほしい場所の一つです。



2009年度日研生
ラチコワ・ナディヤ

日研究生との思い出、そして不思議なつながり

文・江口真規

私が日研究生の指導に関わり始めたのは、着任から一年が経過した2020年度の秋学期でした。当時はコロナ禍でほぼ全ての授業がオンライン化され、学生と顔を合わせることもままならない時期でしたが、修了レポートの指導学生は熱心に研究室を訪問してくれました。卒業後、大学院生として再びつくばに戻って来てくれましたので、コロナ禍の分も取り戻せたのではないかと思います。

2021～2024年度に担当した「日本語・日本文化共同研究III」も、日研究生とのよい思い出となっています。この授業では、秋田県立大学のご協力を得て、秋田市の竿燈まつりに参加しました。にぎやかで幻想的なまつりの後、参加者が宿泊した農家民宿では、夜遅くまで歓談が続いたとうかがっています。ティーチング・アシスタントを務めてくれた大学院生も、以前の日研究生で、博士課程を終え今年からブラジルの大学で教えています。この授業の経験を通して、日本語教育に関心を持ち、日本語教師を目指している日本人学生もいます。

これまでの日研究生とは、大学院進学や国際学会への参加、日本での就職など、様々なかたちで再会を果たしています。また、2023年度の日研究生2名は、実は私の出身研究室のトルコの先輩の教え子で、その先輩とは昨年一緒に本を出版しました。今年度日研究生のトルコからの学生2名は、このときの学生の後輩にあたるそうです。ほかにも、以前留学した先輩の話聞いて、日留学類に留学している日研究生も多くいるようです。このように、これまでの日研究生や筑波大学でのご縁が何重にもつながりながら、現在のプログラムがあるのだと感じさせられます。

私自身も、学生の頃に国費プログラムで一年間アメリカに留学し、英語やアメリカの文化・社会を学びました。長期休暇中には、アメリカ大陸横断の旅に出かけました。留学中に会った世界各国の友人とは、互いの国を訪問し合いながら、10年以上経った今でも交流を続けています。帰国後、英語教育や国際交流に関わる仕事に携わるようになり、このときの経験がなければ、今の私はなかったといっても過言ではありません。これまでに日研究生プログラムに参加した方、現在の日研究生、そしてチューターのみなさんも、ぜひこのプログラムで得られたつながりを大切にしていきたいと思います。不思議なご縁でめぐりめぐって、きっとみなさんの将来を形づくるものになることと楽しみにしています。



「日本語・日本文化共同研究III」で日研究生と一緒に訪れた秋田市民俗芸能伝承館

筑波大学 日本語・日本文化研修留学生
ニュースレター 2026

発行日：2026年4月1日

発行元：筑波大学 日本語・日本文化学類

<https://www.japanese.tsukuba.ac.jp/>

E-mail: nichi2_office@un.tsukuba.ac.jp

本紙を無断で複写・複製することを禁じます。

©Japanese Culture/University of Tsukuba